

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January [Vol.3]

ブロック報告

- [北海道] 北海道から—小規模館から見た動静 菅 訓章 ● 2
- [東北] 被災地の美術館と美術家、その後 大野正勝 ● 4
- [関東] 美術館の初心 関東ブロックから 水沢 勉 ● 6
- [東京] 再生・ボーダレス・初 保坂健二郎 ● 8
- [北信越] 巡回展に思う—走るアート・クサマヤヨイ《水玉乱舞》号の底力 不動美里 ● 10
- [東海] 展覧会（特別展）の傾向から見えてくるもの 山田 諭 ● 12
- [近畿] 近畿圏、近年の動向から 奥村泰彦 ● 14
- [中国] 地域の文化資源と結びつく美術館 前田淳子 ● 16
- [四国] 高松、丸亀、久万、そして徳島 吉川神津夫 ● 18
- [九州] 地域の現代芸術祭との連携による美術館の活性化 菅 章 ● 20

部会報告

- 保存研究部会 伊藤由美 ● 22
- 教育普及研究部会 前田淳子 ● 23
- 情報・資料研究部会 川口雅子 ● 24
- 小規模館研究部会 坪井則子 ● 25
- ホームページ部会 宮武 弘 ● 26
- 機関誌部会 尾崎信一郎 ● 27
- 美術館運営制度研究部会 山梨俊夫 ● 28

事務局から 29

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 30

編集後記 30

全美フォーラム

- 01 サステナビリティのゆくえ 貝塚 健 F-01
- 02 「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業に参加して 一條彰子 F-04
- 03 アジア交流雑感 黒田雷児 F-08
- 04 二年後。自然と芸術、そしてレクイエム 市川政憲 F-11
- 05 日本美術を海外に紹介する —より良い英訳を作成するためのヒント— 白原由起子 F-15
- 06 空間芸術と時間芸術の横断 プロジェクト「アート・コンプレックス」 中野仁詞 F-18



全国美術館会議第 26 回学芸員研修会は 2011 年 12 月 6 日に教育普及研究部会を担当部会として、国立西洋美術館で開催されました。「社会教育・社会学習の歴史と実践—美術館の教育普及活動を考えるために」をテーマに講演や実践報告が行われ、129 名の参加者が熱心に聴き入っていました。今年度の学芸員研修会は 3 月 25 日に国立西洋美術館で開催される予定です。多くの方の参加をお待ちしています。

北海道から——小規模館から見た動静

菅 訓章（神田日勝記念美術館）

私の勤務する神田日勝記念美術館は来年度開館20周年を迎える。当館では近年空調機器の修繕が相次いでおり、毎年2～300万程度の補正予算を組む状況にある。幸いまだ部品の補填がきくため小規模経費の支出で事なきを得ているが、既に機器本体は製造中止となっており、整備計画を検討しなければならない時期にさしかかっている。そんな視点で見ると、比較的歴史の新しいとされる北海道の美術館の多くが、開館40周年の網走市美術館を筆頭に、30周年・20周年を迎える時期を迎えている。こうした美術館における小規模の修理・修繕の例は散見するが、昨年から本年にかけて北海道立近代美術館、木田金次郎美術館、札幌芸術の森美術館が施設改修のための半年にわたり休館を実施したことが眼をひいた。しかしこの期間、それらの館は単に施設を休館していたわけではない。北海道立近代美術館では、30年間に蓄積された「北海道の美術」、パスキンを始めとする「エコール・ド・パリ」、「ガラス工芸」等の豊富な収蔵作品群を、従来からも実施はしていたが、北海道内の美術館に貸し出し、多くの館における企画展の中核を構成した。当館も横浜に貸し出された同館所蔵の「室内風景」等の神田日勝の代表作群を休館中預かることとなり、急遽特別展を開催するという貴重な機会を得た。また従来市町村のために優れた美術作品の鑑賞の機会を提供する「移動美術館」の会場を倍増した外、作品貸与だけにとどまらず近代美術館の美術作品の魅力を青少年に普及するため

に、道央地域の学校を対象に学芸員が作品を帯同して鑑賞事業を行う「アート&トーク・デリバリー」を企画、13市町村で実施したことは特筆されよう。また木田金次郎美術館は、海岸沿いに立地する施設であることから塩害を考慮して改修を繰り上げ実施したが、木田画伯作品を通じて交流を深めた北海道銀行の収蔵施設を活用し休館中の作品保全に万全を期した。同時に北海道立近代美術館で開催された「北海道銀行コレクション展」開催にも木田美術館が参画、同美術館が所在する岩内町から鑑賞ツアーを実施するなど、木田という画家を通じて日常的に構築された道銀との緊密な関係をフル活用した。同時に子ども作品展などの展示活動や絵画教室やワークショップ、美術館講座等は近接する公民館施設（一部郷土館）を活用し、従来と変わらない活動を継続したことは評価されよう。

来年度苫小牧に従来の博物館施設にあわせ美術館が開館する。2008年の洞爺湖芸術館、紋別市立博物館まちなか芸術館、室蘭市民美術館等、ここ数年市町村に美術館の開館が眼につく。こうした地域に根ざした美術館の誕生は待望するところといえる。このことは今年度当館が神田日勝に関連して「新具象」に関する企画展を開催する過程で痛感させられた。深川市出身の與志崎朗は、日勝が遺した作品アルバム等から初期に影響を受けたことがうかがえるが、主体美術協会の創立会員であり、代表作《花嫁の櫓》は第15回日本アンデパンダン展の第一室に展示されるなど、独学とはいえ注目すべき

幻の画家といえる。しかし公的美術施設にその資料はほとんどない状況であり、その概略は遺族に負うことが大であった。また作品の殆ども遺族の所蔵であり、作品保全に課題を残している。同様に雪害で倒壊以来美術館活動を休止している夕張市からも作品を借用したが、この美術館には炭鉱を背景に生み出された多くの貴重な作品群が収蔵されている。幸い作品は被災を免れたが、作家や作品についての多くの知見は元学芸員の知識に負うところが大きかった。夕張が刻んだ充実した美術館活動の足跡は、学芸員等の関係者とともに雲散霧消させてはならず、後世に引き継がれるべきものであろう。現況では近代美術館を中心として道内を4エリアに区分して道立美術館が設置されているが、北海道全域にわたる美術の流れを網羅することは不可能であり、点在する市町村立美術館はそれをカバーするには至っていない。埋もれ幻と化する美術史の空白というアンバランスを解消する意味で、地域に根ざした美術館の充実が望まれる。当館が所在する十勝地域では昨年北海道立帯広美術館が企画した「十勝の美術クロニクル」展により、従来等閑視されていた地域の美術史を体系化する試みがなされた。十勝にとってそのことは基礎作業の第一歩であるが、道立施設の学芸員が北海道全域を対象とする転勤族である宿命を考えると、クロニクルの充実・改定・発展は、当館を含めて地

域の美術施設の大きな課題となっている。

植木蒼悦（長万部）、松島正幸（岩見沢）、三岸好太郎（札幌）のみであった美術館群に、1993年、坂本直行記念館（中札内、六花亭）と当館が開館して一種の社会現象となったことから、これ以来、木田金次郎（岩内）、小川原脩（倶知安）、西村計雄（共和）、伏木田光夫（浦河）など画家の個人名を冠した美術館が町おこしのシンボルとして相次いで誕生した。これらの美術館は次年度以降順次20周年を迎える。しかし現在個人名を冠した美術館の誕生は影を潜め、どの館も入館者確保の苦闘が続いている。その中で木田、西村、小川原の隣接する3館は、町を巻き込む形で後志ミュージアムロードを組織し、テーマ展やスタンプラリーなどの共同事業を組むなど観光事業ともタイアップした展開を進めている。当館も本年秋から隣接する個人コレクションが主体の福原記念美術館との共通入館券の発行に踏み切り、両美術館の知名度の向上と入館者の確保に意を用いている。またこれらの館ではいずれも単数の学芸員しか配置されないことから、学芸員の個性が館の展開に投影され、それが館の顔として形成されつつある。しかし一方でこれらの美術館も学芸員の世代交代期にもさしかかっており、その顔がどう変貌していくか、ひとつの転換期が近づきつつあるように思われる。



「神田日勝と新具象の画家たち展」会場風景

被災地の美術館と美術家、その後

大野正勝（岩手県立美術館）



3.11 から 1 年半が経過したが、岩手県の場合、内陸では南部地域が放射線被害を受けた他は目に見える被害はさほどなかったものの、三陸沿岸部では未だ確かな復興への道は見えない。職員全員の命が失われ、収蔵資料も甚大な被害を受け、廃墟同然の姿になった岩手県の陸前高田市立博物館は再建の目途すら立っていない。施設、所蔵品ともに大きな被害を受けた宮城県の石巻文化センターも同様である。宮城県は広範な津波被害地を抱え、福島県は警戒区域が解除されることなく、捗らない放射線除去作業や補償問題などの解決には想像を超えるものがある。

そんななかでも、3.11 という災害と被災を見つめ、記録に残そうという活動が出てきた。宮城県気仙沼市にあるリアスアーク美術館は、一時再開が危ぶまれていた時期もあったが、今年 7 月末から一部開館、9 月からは常設展示が再開された。職員はじめ関係者の復興に向けたご努力を思うとただ頭が下がる思いである。今後は過去の津波災害に加え、あらためてこのたびの災害を記録に残すべく「東日本大震災の記録と津波の災害史」というテーマを常設展示に加え、来年 4 月から全面開館予定とのこと。

宮城県美術館では、全国美術館会議もその大きな力となった文化財レスキューにより修復、保管している被災を受けた石巻文化センターの所蔵品のなかから、石巻出身の彫刻家・高橋英吉の作品を選んでこのたびの展覧会（9 月 29 日～2013 年 3

月 24 日）が開催されている。その高い芸術性への注目も去ることながら、太平洋戦争中にガダルカナル島で戦死したこの若き彫刻家の展覧会からは、このたびの津波被害への悼みと、展示することでこのたびの記録を残そうとする関係者の気持ちが伝わる。同センターのレスキュー作品は石巻に展示施設が再建されるまで預かり続けるのだという。

岩手県立美術館でも同様の動きがある。同館でも全美会員館からの有志によるレスキュー活動により処置を施された陸前高田市立博物館の美術品を預かっており、来春（2013 年 2 月 2 日～4 月 14 日）、岩手県立美術館の常設展示にて約 30 作家の作品を各 1 点ずつ展示し、美術品が津波被害を受けたその現実と修復をドキュメントとして紹介しようと準備している。これら美術品も、いつの日か陸前高田市に博物館が再開するまで預かり続けるつもりだ。

もう一つ、いわき市立美術館で開催された「野沢二郎―花片／近景の水」展（7 月 21～8 月 26 日）について触れたい。野沢二郎氏は茨城県の沿岸部に在住。少なからず震災の影響を受けている。今回はその被害がより深刻な隣県福島での発表である。会場のいわき市立美術館では、展示室ではなく 1 階のロビーでの展示。14 点の絵画はすべて 3.11 以後に制作されたもの。3.11 以後の野沢二郎を取り巻く、もちろん私たちをも取り巻く世界との関係性のなかから生み出されたそれら作品は、展示条件の整わない場所でのインスタレーション的

な展示による仮設性が、この時期、却って見る者に内省への意識を誘う。

こうした各館の試みは、このたび岩手、宮城、福島の各県立美術館を巡回した「東北三都市巡回展―ルーヴル美術館からのメッセージ―出会い」展の話題性と比べると地味ではあるが、支援と連帯の気持ちを示したルーヴル展とは違った意味での被災への問いかけと意義を考えさせられる。

美術館の復興の歩みは、受けた被害の度合いや所管する自治体の状況によってさまざまだが、いずれの館からも、続けられる被災への問いかけと、以前のように、市民県民の方々に来館してもらいたいという思いが伝わってくる。実生活面での 1 日も早い復興は急務だが、美術を通じて私たち自身の生き方について考えようという美術の役割を、3.11 以後どの美術館人もあらためて考え噛みしめているに違いない。

それは地方を拠点に活動続ける美術家たちも同様だろう。ここでは、岩手県での二つの活動を

紹介したい。一つは、盛岡市にある「彩園子」というギャラリーで 9 月から 11 月まで開催された 12 人の美術家たちが週替わりで二人ずつ個展を開催するというもの。これを企画した鎌倉市在住の美術家 K 氏の意図は、震災復興を声高に叫ぶつもりはないが、3.11 から少し時間が経過した岩手県で活動を続ける彼らの素のままの仕事を紹介したいというものだ。

もう一つは、宮城と岩手を拠点に活動する美術家たちの活動と交流を継続的に支えたいとして 2010 年に設立された「センダイモリオカアート」の美術家たちの展覧会。今年は 24 人によって盛岡の「旧石井県令邸」という洋館を会場として 11 月に開催された。こちらは昨年引き続き「自分たちの住まう地域・場所での活動」をテーマとし、この時期あらためて地方で活動することの意味を問い直そうとしたもの。

3.11 から 1 年半が経った。美術館も美術家も、あらためて人と美術の関係を見つめようとしている。



いわき市立美術館「野沢二郎―花片／近景の水」展会場風景（撮影：大谷健二）



宮城県美術館「高橋英吉」展会場風景

美術館の初心 関東ブロックから

水沢 勉 (神奈川県立近代美術館)



美術館という存在が社会全体のなかで不透明になっているように感じる。さらにいえば、美術館が、3.11 以後、日本という近代国民国家の制度とともにまるごと漂流している感覚をもつのはわたしひとりであろうか。「いま美術館は冬の季節である」という風に喩えるひともしないけれど、本当のところ、事態はもっと深刻で、季節感さえも失うほどに、すでに潜在していた脆弱性が一気にあらわになったというべきかもしれない。

危機意識をことさらにあおろうというのではない。ジョン・ケージに倣うことを許してもらえらば、重すぎる責任はいったん大地に返すべきであろう。それも、揺れる大地に。

こういうときにこそ、原点を見直したいと思う。初心を思い起こさなければならないと思う。

この春に初めて全国美術館会議の会員館の一つである栃木県の小山市にある市立車屋美術館を訪れた。糸井潤さんという 1971 年生まれの写真家の個展「Cantos Familia 光が紡ぐ散文詩」が開かれていたからである。すでに東京のギャラリー「工房親」で発表されていたフィンランド滞在中に制作された「Kaamos」のシリーズがどう展示されるのか楽しみに訪ねてみた。

開館は 2009 年 4 月。国の登録文化財である旧小川邸の母屋と土蔵を活用し、さらに 200㎡に満たない小さな展示室に米倉が生まれ変わっている。お目当ての「Kaamos」シリーズは 3 点が選ばれ、土

蔵の空間のなかに壁からすこし浮かすようにしてみごとに大胆かつ繊細に展示してあった。「Kaamos」は「極夜」を意味するフィンランド語。日中でも暗闇に近い極地特有の現象である。おそらくカメラも、写真家の身体も、ぎりぎりの過酷な条件下での撮影であったにちがいない。露光時間は長いはずだが、対象は、まさしく凍りついたように静寂の極にあって身じろぎもしない。小川家の肥料小屋であったという土蔵にそれが展示されていることの不思議。命を育むべき湿気を含んだ母胎的な空間に、それを最初から拒んでいるような過酷な氷点下の風景が浮かんでいた。そして、土蔵以外の展示室にも、母屋の空間にも、糸井さんの作品がそれぞれに工夫を凝らして展示されていた。

こころ惹かれたわたしは、秋の企画展「Stepping Stone ～未来の選択のための今ここにつくる実験場所」という若手作家たちのグループ展にも足を運んでみた。選ばれていたのは石澤英子、八木良太、pippi の 3 人。なによりも若々しく瑞々しい。力まず、伸びやかに、各自の才能が、小さいけれど、多様な空間に、飛び飛びに step していた。そこには担当の学芸員の姿も一緒に見え隠れするように感じられた。

恥ずかしい次第だが、じつは第 3 金曜日が休館という情報を見逃して出かけたわたしは、入り口の「本日休館」の掲示にしばらく呆然としていたのである。親切にも館員の方が会場を開けて案内してくださった。幸い比較的温暖な日であったものの予

定外の光熱費の出費を招いたわけだ。余計な仕事を増やし、さぞや迷惑な来客であったろう。

しかし、館長以下、館員全員が同じ部屋で仕事をされていて、そこで図々しくもお茶までいただきながら、運営のことや、企画の予定などをお聞きすることができた。いつのまにか不思議になつかしい気持ちになったのは、わたし自身、鎌倉の鶴岡八幡宮境内の小さな近代美術館から学芸員としての仕事を始めたからにちがいない。

現在、神奈川県立近代美術館の葉山館では、期間限定のプロジェクトとしてイギリスの彫刻家アントニー・ゴームリーの作品「TWO TIMES」を野外設置している (2013 年 3 月 3 日まで)。アーティストとともに美術館の敷地の内外をつなぐ計画を建てたものの、周辺住民の充分な理解を得るにはいたらず、残念ながら敷地内に留めてプロジェクトは現在展開している。結果的には、ゴームリーの作品が抱懐するコスモス的なスケールの発想からすれば、小さな問題であったかもしれない。しかし、来日したゴームリー本人は、繰り返し、ことあるたびに、アートに「公私」の区別はなく、すべての人々

に開かれてあるものであり、世界を認識する「触媒」としての役目を果たすものと語っていた。また、美術館内に展示されるアートと、いわゆるパブリック・アートの差についても、東京での講演会の際の質疑では、本来区別はないことを強調し、美術館の存在意義は、社会にたいする批評的な機能を果たすことにありと発言したことが忘れられない。

「啓蒙」。ずいぶんと埃を被ってしまった言葉だ。教育関係者は「啓発」という言葉を好むようだ。ホルクハイマー＝アドルノの痛撃もいまなお効いていて使おうとするとい口ごもる。しかし、美術館／博物館は、啓蒙主義の産物であり、あくまでもその思想の射程内で機能してきた。現在の漂流感情ともいうべきあてどなさ、その射程の域外に美術館／博物館がいままさに出ようとしているからなのかもしれない。危機によって批評的な意識は目覚め、原点を確認し、さらに未来を模索するという、絶え間ない往還によってのみ、美術館の初心は、啓蒙の射程を超える批評性も含めて、息を吹き返す、いや、生まれいずるのではなからうか。



小山市立車屋美術館における糸井潤の作品展示風景 (撮影：山本糾)

再生・ボーダレス・初

保坂健二郎（東京国立近代美術館）



今年 2012 年はサンフランシスコ講和条約が発効してから 60 年。日本が国家として再独立を果たしてから還暦を迎えたわけだ。そんなおめでたい年に、東京都内ではいくつかの美術館が生まれ変わった。

まずは東京都美術館である。《真珠の首飾りの少女》の展覧会以外についても本欄では言及しておきたい。彼らが「リニューアル後の初の企画展」と呼ぶところの、「Art & Life 生きるための家 建築公募展」(7月15日～9月30日)だ。そこでは、「これからの住宅についての提案を公募し、建築界の次世代の担い手たちによる試みを通して、新しい価値観を持った近未来の「すまい」の在り方を提示しよう」としていた。アイデアを公募し、最優秀賞は原寸で制作するというシステムは、建築展としてのみならず、展覧会としても斬新である。「近未来のすまいの在り方を提示する」という企画からは、ニューヨーク近代美術館が、建築部門を設立した時、モダニズム建築という理念をアメリカ国内に流布させることを目的にしていたという事実を思い出す。

次に東京国立近代美術館。所蔵品ギャラリーのインテリアをリニューアルした後、二部構成になる「美術にぶるっ！ベストセレクション 日本近代美術の 100 年」展 (10月16日～2013年1月14日) でオープンした。また、休館していた時期、工事が行われていない企画展ギャラリーを使って開催された「14の夕べ」(8月26日～9月8日)は、毎日違うパフォーマンスを 14 日間連続で、しかも夜に上演するという野心的なものだった。

そして東京ステーションギャラリー。「オープンおよび東京駅復原工事完成記念展」として「始発電車を待ちながら 東京駅と鉄道をめぐる現代アート 9つの物語」(10月1日～2013年2月24日)が開催された。あえて現代美術をもってきたところに、同館の意気込みを感じることができる。

企画展そのものに話を移そう。いわゆるファインアート以外の展覧会が人気を博したことが目立った。森アーツセンターギャラリーでの「ONE PIECE 展」(3月20日～6月17日)は 31 万人の来館者を集めたという。そのほかアーツ千代田 3331 での「大友克洋 Genga 展」や東京都現代美術館での「館長庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和平成の技」展 (7月10日～10月8日)も話題を呼んだ。「特撮博物館」展は、庵野を館長とした「架空の博物館」を「実際の美術館」内につくるという設定であった(企画・制作協力は鈴木敏夫)。こうした「museum in museum」という手法には、日本特有だとも言われる「美術館／博物館」というボーダーの解体のためのヒントを見いだせるかもしれない。

外部のクリエイターを企画者に立てる展覧会としては、国立科学博物館で開催された「縄文人展 芸術と科学の融合」(4月24日～7月1日)もあった。企画はデザイナーの佐藤卓。「実物」の展示は男女の人骨二体のみで、残りは、上田義彦が人骨を撮影した写真だけである。レプリカの展示が一般化している博物館であるから、「実物」が少ないこ

とへの違和感はあまりなかったが、ミュージアムにおける「芸術と科学の融合」をうたうのであれば、たとえばフンボルト・フォーラム (ベルリン) における試みの水準で語られる必要があるだろう。

「初」であることをうたう展覧会が多いのもここ最近の傾向であろう。森美術館の「アラブ・エクスプレス展：アラブ美術の今を知る」(6月16日～10月28日)は「アラブの現代美術を集めた日本で初めての大規模展覧会」であった。そこで(隠れた)テーマの一つとなっていたのが「イスラエル」であるが、その美術を紹介する展覧会は日本では 2001 年に開催されている。11 年という間隔がなにを意味するのか、美術(館)関係者は今一度考える必要があるだろう。

もう一つが、国立新美術館の「『具体』ーニッポンの前衛 18 年の軌跡」展である (7月4日～9月10日)。1965 年以降のいわゆる「後期」を含める形で全容を紹介するのは東京では初めてだとい

う。しかし「後期」がこれまで東京という地元から離れた場所で紹介されてこなかったのにはそれなりの理由があるのではないかと、そう会場で感じざるをえなかった。いたずらに「初」を狙う風潮は、美的価値の判断にかかわる美術館としては戒めるべきだろうとも。

とはいうものの、若手から中堅作家が美術館では初めてとなる個展をするケースが増えてきているのは、やはり評価したい。東京都写真美術館での川内倫子 (1972 年生まれ)、原美術館での安藤正子 (1976 年生まれ)、練馬区立美術館での棚田康司 (1968 年生まれ) などである。また、渋谷区立松濤美術館での「小道具、その行き先 一坂田和實の 40 年」(10月3日～11月25日)のような展覧会は、「骨董」をめぐって開催してきたこれまでの企画＝研究成果をさらに推し進めたものであり、そこには、望ましい美術館の(あるいは学芸員の)姿勢が見える。



小林耕平 (タ・イ・ム・マ・シ・ン)
「14の夕べ」、東京国立近代美術館、9月5日
(撮影：前澤秀登)

巡回展に思う

——走るアート・クサマヤヨイ《水玉乱舞》号の底力

不動美里（金沢 21 世紀美術館）



不況と社会不安が続き、「冬の時代」と言われて久しい美術館の多難な運営も出口が見えない中、所蔵作品の活用や巡回展の意義は益々高まっている。問題意識を共有する学芸員が館を横断し、協働で企画を立ち上げ、経費分担して実施する巡回展では、幹事館でなくとも各館の指針に基づいてそこでしか見られない独自性を発揮するのが巡回館学芸員の本分となる。

新潟は昨年、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012」（7 月 29 日～9 月 17 日）と「越後妻有里山現代美術館「キナーレ」オープン、「水と土の芸術祭 2012」（7 月 14 日～12 月 24 日）という大型イベント開催の年。半官半民の実行委員会によるこれら広域の「祭典」に並行して、新潟県立近代美術館では「象徴派—夢幻美の使徒たち」（9 月 8 日～10 月 21 日、巡回）「GUN—新潟に前衛があった頃」（11 月 3 日～1 月 14 日）、新潟市美術館では「鬚囀—ふたたび虹のかなたに」（7 月 28 日～10 月 8 日、巡回）、テーマを掲げてシリーズ化したコレクション展などを展開。いずれも各館の優品が活用され、堅実な研究に基づく企画が並んだ。長野では松本市美術館が開館 10 周年記念展として「草間彌生 永遠の永遠の永遠」（7 月 14 日～11 月 4 日、巡回）を開催。同展は 2012 年 1 月の国立国際美術館を皮切りに埼玉、松本、新潟を巡回。さらに 2013 年度の予定もほぼ決定し、現代美術の巡回展として異例の集客とロングランを記録しつつある。福井県立美術館では地元コレクターの優品と館蔵品も加え、近現

代西洋美術のエッセンスを紹介する「ストラスブール美術館展 ゴーギャン、ピカソからローランサンまで」（4 月 20 日～5 月 20 日、巡回）、またコレクション展「土屋公雄コラボレーション展」（9 月 16 日～11 月 4 日）と連動させた、地元作家の個展「土屋公雄展 夢のあとに／交差する時間」（9 月 16 日～10 月 21 日）を展開。富山県立近代美術館では、「世界ボスタートリエンナーレヤマ 2012」（6 月 9 日～9 月 3 日）が 10 回目を重ねた。世界 53 の国や地域から過去最多 4,622 点の応募があり、多様な世界状況を映す窓としての重要性が確認された。デザイン史と美術史を横断する「デザインとしての椅子 アートとしての椅子」展（9 月 8 日～11 月 4 日）は、同館の近現代コレクションと研究の充実振りを示した。石川県立美術館「孤高の画家 田中一村展」（7 月 28 日～8 月 26 日、巡回）は、地元石川県能登の「やわらぎの郷」聖徳太子殿に一村が遺した 49 枚の葉草図天井画が県文化財保存修復工房によって修復完了されたことを記念する意味をもつ。地域への貢献と全国巡回のコンテンツの充実という双方向に資する展覧会のかたちがある。金沢 21 世紀美術館の「ス・ドホ パーフェクト・ホーム」（11 月 23 日～3 月 17 日）は韓国の現代美術家ス・ドホの日本初個展を広島市現代美術館との連携により実現。またコレクション展と企画展を連動させ通年で展開した「ソンエリュミエール：物質・移動・時間、そして叡智」（4 月 28 日～3 月 17 日）では、所蔵作品の再解釈を通じて 3.11 以降の世界観の観照を試みた。

さて今世紀、オークションでの記録も更新を続け、ティト・モダン発の個展は欧米の主要美術館を巡回、ルイ・ヴィトンとのコラボレーションにも取り組む 83 歳の現役作家、草間彌生は今年も世界を席卷している。2004～05 年に国内巡回した大きな個展の記憶も褪めず、また主要作品の多くが国外巡回中に日本で開催する個展—加熱する期待にどう応え、或いはどう裏切り、意義ある企画を実現するのか主催者にかかったプレッシャーは測り知れない。しかし松本市美術館が開催した「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展はごく自然体だった。郷土が生んだ作家、草間彌生の常設展示室を設け、調査に注力してきた同館は、所蔵作品 338 点に加えて、作家が所蔵する貴重な初期作品 177 点の寄託・借用手続きを経て、現在計 515 点を館で保管している。一美術館の強い内的必然性、とりわけ担当の澁田見彰学芸員の揺らぎのないベクトルがこの巡回展の芯にある。松本での展示が見せる草間ワールドの断面には、表層で鑑賞者を喜ばせるだけに終わらせない奥行きがあった。草間がこの地に生を受けてから日本を離れるまで呼吸し触れ続けた街の空気や地面と、作品世界が地続きに在るという抜き差しならぬ感触が、作品の輪郭を際立たせ、鑑賞体験を一層リアルなものにした。

そのリアリティは、松本駅と美術館をつなぐ「クサマバス《水玉乱舞》号」に乗車すれば、より濃厚になる。城下町の歴史と人々の気骨が漂う街を走る赤い水玉はひととき目を引く。不規則なリズム

とゆるいスピードは、走るアートの鑑賞にうってつけの予測不能な刺激を五感に与える。日常と非日常が混在するスリリングな時空バス、観客が参加してこそ稼働するアートワークが街バスとして当たり前往来する風景が松本市にある。クサマバスは駅と美術館のみならず、街と草間ワールドを、鑑賞者と作品を深層でつないでいる。市内周遊バスのうち 1 台が草間作品に変貌したのは 2 年前のこと。2010 年 12 月 1 日の除幕式には作家自身が出席し、バスの正面にサインを入れた。車体を支持体として草間がコラボレーションした作例は他にもあるが期間限定の企画も多かった。キャッチコピーの「草間彌生が手がけた走るアート」「世界にたった一台」は伊達ではない。クサマバスは無期限に走る作品である。発案者の一人である澁田見氏は、文化をアピールし誘客したい市の観光政策と民間バス会社のアプローチの間に立ちつつ、展示室でのインсталレーション同様にバスの作品化をキュレーションした。作家、作品、それらを取り巻く歴史も人間も「現に生きている場である故郷」ならではの難しさ厳しさがある。クサマバス実現の陰にも学芸員の尽力があった。

ローカルティを掘り下げることは、日本発の美術のルーツを掘り起こしてグローバル化の地殻変動のなかに再編集する作業につながるだろう。ことは草間彌生に限らない。日本の美術の行方と在処を考える時、この度の松本市美術館の未曾有の成功に学べることは多い。



「クサマヤヨイ《水玉乱舞》号」の外観と車内

展覧会（特別展）の傾向から見えてくるもの

山田 諭（名古屋市美術館）



東海ブロックの美術館において、近年開催された展覧会（特別展）を振り返り、その傾向を分析することで、美術館の置かれている現状について若干の考察をしたい。

ラインナップを見て、まず気がつくのが、海外の美術館のコレクション展の増加である。「マンチェスター大学ウィットワース美術館所蔵 巨匠たちの英国水彩画」展（岡崎市美術博物館、4月7日～6月24日）、「大エルミタージュ美術館 世紀の顔 西欧絵画の400年」展（名古屋市美術館、7月28日～9月30日）などがあり、また、少しさかのぼれば「ストラスブル美術館所蔵 語りかける風景」展（岐阜県美術館、2010年9月1日～10月17日）、「レンバッハハウス美術館所蔵 カンディンスキーと青騎士」展（愛知県美術館、2011年2月15日～4月17日）、「シュテーデル美術館所蔵 フェルメール《地理学者》とオランダ・フランドル絵画」展（豊田市美術館、2011年6月11日～8月28日）などもこれに類する。

これらの展覧会は、ほとんどの場合、新聞社や企画会社の「持込み」による巡回展であり、入館者の数字は計算できるけれども、美術館（学芸員）にとっては、最も安易な展覧会である。かつては誰もが知る大きな美術館ばかりであったが、最近では対象を拡大して、あまり知られていない小さな美術館へと移行しているように見える。

また、国内の美術館のコレクション展も同様の理由により増加している。近年では「ポーラ美術館コレクション 印象派とエコール・ド・パリ」展（静岡市美術館、

2010年10月2日～11月28日／名古屋市美術館、2010年12月7日～2011年2月6日）、「パスキンとパリを愛した画家たち 北海道近代美術館コレクションを中心に」展（メナード美術館、2010年4月24日～6月27日）などがあり、最近では「川崎岡本太郎美術館所蔵作品による エネルギー充填！我らに伴走する岡本太郎」展（碧南市藤井達吉現代美術館、10月10日～11月25日）が開催された。

次に目立っているのが、個展形式の展覧会の増加である。

「生誕100年 ジャクソン・ポロック」展（愛知県美術館、2011年11月11日～2012年1月22日）、「イクムラレイコ うつりゆくもの」展（三重県立美術館、2011年11月8日～2012年1月22日）、「村山槐多の全貌」展（岡崎市美術博物館、2011年12月3日～2012年1月28日）、「マックス・エルンスト フィギュア×スケープ」展（愛知県美術館、7月13日～9月9日）、「蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち」展（三重県美術館、6月2日～7月8日）、「青木野枝 ふりそぐものたち」展（名古屋市美術館・豊田市美術館、10月13日～12月24日）、「生誕100年記念 丸木俊」展（一宮市三岸節子記念美術館、10月6日～11月25日）、「舟越桂2012」展（メナード美術館、9月15日～11月25日）、「ジョルジュ・ルオー」展（稲沢市荻須記念美術館、10月27日～12月2日）など、古美術も含めて、近代美術の物故作家から現代美術の現役作家まで、また絵画（洋画、日本画）から写真、彫刻、

デザイン、工芸などの幅広い分野の作家まで、特別展の大半を個展形式の展覧会が占めている。実際に、名古屋市美術館の場合には、平成23年度の特別展すべてが個展形式であった。これは偶然ではなく、明らかに美術館の置かれている現状を反映している。

個展形式の展覧会は、何らかの美術的な問題や時代的な主題を設定して企画されるテーマ展と比較するならば、時間的にも、経費的にも、内容的にも簡便な展覧会である。もちろん、長い時間を掛けた調査・研究を踏まえて、その作家の芸術を集大成する回顧展もあるけれども、極端なことを言えば、物故作家の場合には、何らかの理由で作家を選択するだけで、遺族や美術館などから作品を借用すればいいのであり、また現代美術の場合には、作家の理解を得られれば、何もかもお任せにすることもできるのである。

そして、最後に言えるのが、それぞれの美術館のコレクション展の増加である。

「うつし、うつくし」展（愛知県美術館、2月3日～3月25日）、「リニューアルオープン記念 初公開作品を含む県美術館コレクションの精髓による三幕の物語」展（岐阜県美術館、4月5日～5月13日）、「浮舟」展（豊田市美術館、2011年1月8日～4月3日）、「エトランジェー異国への眼差し」展（三重県立美術館、2月4日～3月25日）、「みえるもの／みえないもの」展（豊田市美術館、1月7日～3月25日）、「美しき日本の自然」展（愛知県美術館、9月28日～11月25日）など、これまでは開館〇年を記念する展覧会として企画されるだけであったコレクション展が、特別展の「穴埋め」企画として恒常的に開催される傾向を見せている。出品交渉や作品輸送などの作業や経費を削減できる経済効率の良い展覧会であることが増加の理由と考えられる。

また、「所蔵作品のより一層の活用と魅力的な展示」を目指して、2004年に開始された愛知・岐阜・三重3県立美術館共同企画は、第5回「ひろがるアート 現代美術入門篇」展（三重県美術館、2010年

10月13日～12月19日）と第6回「魔術／美術 幻視の技術と内なる世界」展（愛知県美術館、4月13日～6月24日）が、定期的に開催されている。

以上のような三つの傾向から見えてくるのが、美術館（学芸員）の展覧会の企画力の低下である。

海外の美術館のコレクション展のようにパックとなった展覧会の場合には、巡回先の美術館（学芸員）は、企画内容に参画できないので、実質的には、展覧会の広報、展示、解説及び関連事業に精力を傾けることになる。展覧会の企画立案や作品調査、出品交渉などの能力ではなく、どちらかといえば、展覧会の集客を目的とした「プレゼンテーション」の能力を求められているのである。また、現代美術の個展の場合には、作家の展示構想を実現するために、下手をすれば、「アシスタント」的な仕事をしなければならなくなる。このように美術館・博物館の専門職である学芸員の学術的な創造力を発揮する機会は確実に減少しているのである。その根本的な原因は、展覧会を企画・開催するために、美術館（学芸員）に与えられる時間的、経済的な環境条件の悪化にある。

その反動によって、美術館のコレクションへの依存が高まっているが、コレクションの重要性が再認識されるのは良いけれども、本来的には、コレクションは常設展として展示するものであって、作品の過剰な「活用」が「保存」と相容れないものであることを確認しておくなければならない。

言うまでもないことであるが、美術館（学芸員）の活動は、「収集・保存」「展示・公開」「教育・普及」「調査・研究」が総合的に実施されて初めて、美術館は継続・発展する。しかし、東海ブロックの美術館の現状は、一見すると相変わらず華やかなように見えても、実際には「地盤沈下」が進行している。このような状況は、おそらく東海ブロックに限ったことではないと思われるが、いままさ美術館（学芸員）は、厳しい環境条件のなかにあっても、基礎となる「調査・研究」の活動に意識的に取り組む必要があるのではないだろうか。

近畿圏、近年の動向から

奥村泰彦（和歌山県立近代美術館）



いつの間にか日本でもハロウィーンがそこそこ定着したようで、輸入された文化が兎にも角にも定着していく様子を垣間見られることは興味深い。元々は年越しの行事だったらしく、ちょっと気が早いのが一年のまとめの時期になりつつあるのだろう。

近畿ブロックには、加盟館以外にも多くの館があり、また美術系大学や作家の活動にも、注目すべきものは多かった。

まず思い出されるのは年初から開催された国立国際美術館での草間彌生展が、一つの社会現象と言えるほどの注目を浴びたことだ。海外での個展や大手ファッションブランドとのコラボレーションもあって、作家への関心が異様なほど高まったのは、開催館にとっても想定外だったのではないだろうか。以降も同館は独自の企画を順調に開催している。

11月には横尾忠則現代美術館が開館し、現存作家の仕事を紹介する拠点ができた。この建物は、金山平三記念室や独特の設備を備えた版画展示室があった、かつての兵庫県立近代美術館西館で、コレクションを見せる場として機能していたことが思い出される。今後は作家から寄贈された作品と資料を基に、どのような活動を行っていくのが注目されよう。

他にも大型展の開催は相次ぎ、それはそれで必要なことなのだろう。しかし、研究に基づいて収集した資料を保存し展示する場としての美術館という認識は、依然としてまったく一般的なものではなく、美術館について行われる多くの議論は入口で

つまずいている感がある。

既に一昨年前のことになったが、芦屋市立美術館では指定管理者の選定を巡って学芸員が全員退職するという事態が生じた。その後、体制は一新され、運営は安定しつつあるように見える。だが、指定期間が終わる度に同様の問題が生じる可能性は残ったままで、その都度作品や資料が危険にさらされ、館の運営が停滞する可能性のある制度とどのように折り合いをつけるのか、一つの館の一時の問題では済まないはずだ。

また滋賀県立近代美術館では「今後のあり方」が検討され、2月に滋賀県立近代美術館機能・発進力強化検討委員会が報告をまとめている。

美術館の活動についてしばしば問題視されるのが入館者数だが、芦屋にしても滋賀にしても交通アクセスが不便な立地にあり、その解決は美術館のみでなし得ることではない。滋賀の報告書では、この点についての指摘もなされているが、実際に有効な対策を打つのは難しいことであるし、郊外の文化ゾーンなどに設置された施設が共通して持つ問題点だろう。

翻って当館である。和歌山市の中心部、和歌山城のすぐ南という立地は、集客に悩む郊外型施設からはうらやましがられることも多い。だが実際のところ中心市街は空洞化甚だしく、平日はもとより好天の連休ともなれば人々は郊外へ、アウトドアへ、県外へと流れ、周辺は閑散とする有様である。人の流れが途切れたところをいかに再活性化するか、

シャッター通りと化した商店街と課題は共通するのだが、事態を分析できても効果的な対策を実行できるまでには至らない。

そのような状況下ではあるが、当館ではコレクションの調査を基に、生誕120年となる田中恭吉と川口軌外の回顧展を相次いで開催する他、近隣の学校との連携に取り組むなど、着実に成果は上げているものと思う。幅広く活動を知ってもらうにはまだまだ遠い実感はあるが、近辺の中学生には「夏休みに来るところ」という、ハロウィーン程度の認識はできてきているようなので、更なる広がりとして定着を促していきたいところだ。

一方で美術館を離れてみると、町おこしや観光と組み合わせられた地域でのアートイベントが隆盛を迎えている。現代芸術家による地域での活動は、細く長く様々な形で行われていたが、ここ数年、特に近畿圏では瀬戸内国際芸術祭の盛況を受けてだろう、各地の取り組みが広く喧伝されるようになってきた。「BIWAKO BIENNALE」、「六

甲ミーツ・アート」、「HANARART」、「龍野アートプロジェクト」、「西宮船坂ビエンナーレ」、「木津川アート」、「見つけ！このはな」等々、網羅できないほどだ。主催者、会場、規模、作家、今後の見通しなどそれぞれで、ひとくくりに語ることもできないが、地域の活性化に現代美術が一定の役割を果たすことが期待されている点は注目されるし、作品を体験する場が増えることは望ましいことに違いない。

当館も地元のNPOに協力して中辺路でのアーティスト・イン・レジデンスに関わってきた。今年は、2年前に佐藤時啓氏が制作したツリーハウスのカメラ・オブスキュラを解体し、リヤカーと一体となったカメラに再生、乗り込んで移動しながら映像を体験する装置が作られた。体験を通して視覚と映像について考えさせられるものである。現在のところこのような取り組みは点にとどまっているが、面として広がっていくことがいかにして可能か、模索は続くのである。



「生誕120年記念 田中恭吉展」に際しては玲風書房より『田中恭吉 ひそめるもの』を刊行した。



《リアカメラ》と佐藤時啓氏。背景の木立にあった《ツリーハウスカメラ》が生まれかわった。

地域の文化資源と結びつく美術館

前田淳子（山口県立美術館）



中国ブロック各地の美術館で開催された地域の文化財を取りあげた展覧会を紹介していきたい。

前年度の展覧会ではあるが、岡山県立美術館で開催された「長谷川等伯と雪舟流」（1月20日～2月19日）もその一つ。岡山に生まれた雪舟等揚と雪舟後継者を名乗る長谷川等伯のそれぞれの画系を比較する本展は、雪舟関連の出品リストを見るとこれまでの岡山県立美術館の収集活動の成果を感じさせる。所蔵作品の魅力をどう伝えるかの切り口が冴えた展覧会で、会場も賑わっていたと聞いている。

この初夏、広島県立美術館では「平清盛」展（6月1日～7月8日）が開催された。言わずと知れた大河ドラマ関連で話題性も高く、各地を巡回する展覧会である。広島で平清盛といえばドラマの舞台にもなった厳島神社。展覧会の目玉である清盛が奉納した平家納経（国宝）は、地元でも目にする機会は少なく、この展覧会でその存在を知った人も多かったのではないだろうか。この巡回展に併せて、ご当地ならではのさまざまな企画を加えているところに工夫が光っていた。まずは、「広島・厳島講座」。地元の大学の研究者を中心に、「頼山陽が描いた『平清盛』」「厳島の祭礼と華ひらく文化」「厳島御幸と内侍舞楽 - 都人の記録と在地の記録」「聖地としての厳島神社と平清盛」と題して実施された4回の講座は200人という定員で賑わっていたという。他にも地元の高校生による邦楽演奏や十二単の着付けなどのイベントに工夫が凝らされていた。

夏には、筆者が所属する山口県立美術館では、「防長の絵図展」（7月24日～8月26日）を実施した。過去に開催した、知られざる山口の文化財を紹介する展覧会（「周防国分寺展」「防府天満宮展」）の延長線上にある企画である。山口県文書館所蔵の江戸時代の絵図を中心に、絵図を絵画的視点で紹介しているところが、美術館ならではの特徴である。雲谷派の絵師であった有馬喜惣太という萩藩絵図方の地理図師に焦点を当て、雲谷派の屏風と並べて山の表現、岩や木など絵画的表現を比較できるようにした展示は、地理情報を正しく伝える地図という機能を保ちながらも、水墨画に通じる風景表現、繊細な描写力、美しい色彩を併せ持つ、絵図の不思議な魅力を伝えるものであった。3×5メートルの巨大で色鮮やかな国絵図、萩から江戸までの参勤交代路を描いた街道絵図、伊能図など計15件という小企画で1ヶ月弱の会期ではあるものの1万人強の来館があった。山口、萩、防府といった県内各地は戦災にも遭わず江戸時代の通り名をそのまま残している。自分が住む地の江戸時代の様子を確かめる楽しみに加え、色彩の美しさ表現の豊かさに感嘆する来館者の姿が見られた。

最後に紹介するのは島根県立石見美術館で開催された「東京藝大美術館所蔵 日本近代美術の名品展—森鷗外と米原雲海を中心に—」（10月6日～11月26日）。単なる名品展ではなく、島根県出身であり東京美術学校で教鞭を取った2人、森鷗外と同時代の彫刻家、米原雲海を軸に藝大美

術館所蔵の作品を紹介するという企画である。森鷗外は石見美術館がある島根西部、津和野町出身。今年は生誕150年を記念する年でもある。一方、米原雲海は県東部の出身で、西部ではそれほど紹介されてこなかった彫刻家だという。展覧会は、「日本近代洋画の夜明けと島根」「東京美術学校の開講と森鷗外の周辺」「東京美術学校と米原雲海」「島根県ゆかりの卒業生たち」の4章で構成され、全ての作品のキャプションには作者の紹介や作品のポイントが1・2行で紹介されている。例えば山本芳翠《西洋婦人像》では「麗しき横顔。胸元の軽快な筆運びにも注目」、原田直次郎の《靴屋の親爺》では「迫力満点！明治油彩画の金字塔」といったような具合である。また、新海竹太郎の作品では「鷗外のデスマスクをとった彫刻家」、窪田喜作には「鷗外の講義ノートを残した学生」のように、来館者が地元の文豪森鷗外と重ねて作品／作家に興味を持つようなコメントもあり、展覧会担当者の来館者への心配りが感じられる。主要な作品にはさらに詳しい解説パネルもあり、図録には1点1点に丁寧な解説もつけられている。会場で気軽に読める簡単な解説から、詳しい解説までさま

ざまな段階の情報提供には担当者の苦労が伺えるが、来館者にいかに興味深く作品を見てもらうかという姿勢は、石見美術館の常設展示と特別展の特徴でもある。最終章「島根県ゆかりの卒業生たち」は鷗外と雲海が東京美術学校に在籍していた当時の卒業生から、島根県出身者の作品紹介で、ほぼ100年経ての里帰り作品である。卒業後の活動がわからない人も多く、新聞に尋ね人として掲載して消息がわかった卒業生もいたという。展覧会を機に、さらに郷土の作家の調査研究が深まる結果になったのは展覧会準備の苦労が報われたことだろう。美術学校繋がり、島根初の私立和洋面学校の資料（設置申請の書類、入学者名簿、出席簿）の資料展示もあり、地元と繋げて興味をもたせる工夫が各所にみられる展覧会だった。

地方の美術館にとって、いかに来館者層を掘り起こしていくかは、これまで以上に課題となっている。展覧会を通じて地元へ貢献する美術館となるような様々な視点での企画が求められることになるだろう。まだ掘り起こされるネタはたくさんあるはずで、それをどう提示していくか美術館の腕のみせどころだと考えさせられる2012年度前半であった。



「日本近代美術の名品展」広報物



「防長の絵図」展会場風景

高松、丸亀、久万、そして徳島

吉川神津夫（徳島県立近代美術館）



2012 年は「瀬戸内国際芸術祭」の狭間にあたり、外から四国に対する関心は薄れがちになっていたのではなかろうか。しかし、大きなイベントの有無にかかわらず、各美術館は日々活動しているわけであるし、地元の立場からすれば、できる限りそうした活動を追いかけていくことの方が重要だと思う。そこで、今回は 8 月から 10 月にかけて、私が見た範囲からいくつかの展覧会を紹介したい。

まず、高松市美術館が 2010 年から開催している「高松コンテンポラリー・アート・アニュアル」である。今回の vol.02 は「贈り物と交換」というテーマで開催された。

かつては、各地の美術館でアニュアルが数多く開催されていたものの、現在、目につくのは東京と高松くらいである。高松は学芸員の別部署への異動も行われているため、学芸員が活動するのに決して恵まれた環境ではない。その中で、毎年のアニュアルを「果実を食するだけでなく未来へ向かって苗を育てていこう」（展覧会図録より）というような長いスパンの中で位置づけているのだ。必ず地元在住作家が選ばれていることも、このことと関係しているのだろう。香川県の作家の作品を見たり、作家たちと話したりする機会もあるのだが、特に都市部のような美術シーンがあるようには思えない。その中で、毎回、テーマに沿った地元作家が選ばれていることに、少し驚きを感じるのだ。

出品作品についても少し触れておこう。興味を惹かれたのは山本高之の子供が登場する映像作品である。特に「Facing to the Unknown」で物理学者からブラックホールの話聞かされている子供たちの表情、仕草には、想像力が掻き立てられた。

次に取り上げるのは、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の「ホンマタカシ ニュー・ドキュメンタリー」である。この展覧会は、2011 年 1 月に金沢展で始まり、東京展を終え、1 年の間隔を空けた 2012 年の 6 月から丸亀展が始まったものである。

この展覧会、東京展まではシリーズごとに作品を紹介していたのだが、丸亀展では制作年順に変わったという。担当学芸員によれば、シリーズを混ぜて展示することは、東京展が始まってから作家の意識にあったもので、それが丸亀展で実現されたということである。さらに、通常は所蔵の猪熊弦一郎作品を展示しているスペースで「物物」という企画展も同時開催されていた。これは、同館所蔵の猪熊弦一郎のコレクション（町で拾ったゴミからアンティークまで様々な物）を素材としたスタイリストの岡部美代子の構成とホンマタカシの写真によるコラボレーション展示であった。

また、この展覧会では、作家からの提案を美術館との共同企画で実現した、市内各所でのサテライト展示も開催されていた。ホンマにとっては展覧会が美術館の建物の中だけで完結するのでは

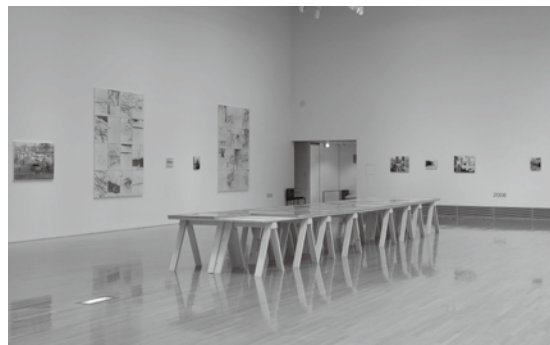
面白くない、その土地だからできることを、地元の人と触れ合いながら一緒にやれたことが嬉しいという思いからであったという。巡回展とはいいながら、全体で見れば丸亀の自主企画展と言って良いような内容であった。

同じ四国とは言え、愛媛まで足を伸ばす頻度は少ない。松山市からさらに山間に入った町立久万美術館となるとなおさらである。しかし、同館の年に 1 本だけの企画展には唸られる。昨年は、前号でも紹介されていた坪内晃幸展であったし、今年は、今回取り上げる「白昼夢—松本俊夫の世界」なのである。

私は、美術館の展示室は映像作品を見せることを想定した場だとは思わない。特に久万美術館程度の小さな展示室で、複数の映像作品を見せようとすれば、どうしても相互の干渉が生じてしまうだろうと思う。しかし、この展覧会の担当者は発想を転換させて、別々の作品の音と映像がミックスされる場を作り出していたのだ。松本俊夫の個展だから可能であったのかもしれない。とりあえず 5 つのテーマは設定されているものの、どのコー

ナーの映像作品を見ている、他の作品の音が聞こえてくる。ただし、音量が程よく保たれているため、騒々しくはない。また、映像も通常のスクリーンやモニター画面だけでなく、壁にまでも直接映写しているのだ。そうして生み出された空間がまさに白昼夢のようであった。残念ながら、担当学芸員に話を聞くことはできなかったが、館のスタッフによれば、松本氏自身も凄く気に入っている展示とのことであった。

最後に私が勤務する徳島県立近代美術館の活動にも少し触れておきたい。「墨と紙が生み出す美の世界」展は、画材である墨にも注目した意欲的な企画であった。室町時代の雪舟から現代作家に至るまで 37 作家 51 点の作品とあわせて、日中韓の貴重な墨の数々を展示したのである。また、若い世代に墨の魅力を知ってもらうため、市内の小中学校、高校で墨を用いた出前授業等も 20 校ほど行った。学校では墨汁を使用するのが当たり前のことになっている現在、墨を実際に擦って、墨色や墨の表情の違いを実感できたことは、生徒たちにとって貴重な経験になったと思う。



「ホンマタカシ ニュー・ドキュメンタリー」
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館での展示風景 2012
(撮影：高橋マナミ)
(写真提供：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)



徳島県立近代美術館「墨と紙が生み出す美の世界」展
出前授業
徳島市立町内小学校

地域の現代芸術祭との連携による 美術館の活性化

菅 章（大分市美術館）



2012 年秋の九州は、ちょっとした現代美術モードであった。その台風の目となったのが別府市で行われた BEPPU PROJECT による「別府現代芸術フェスティバル 2012 混浴温泉世界」である。2009 年以来 2 回目となったこのフェスティバルは、「越後妻有トリエンナーレや横浜トリエンナーレ、「瀬戸内国際芸術祭などと並んで全国の芸術祭の中で注目される存在でもある。

別府の場合、国際芸術祭と呼ぶにはやや小規模だが、そのことがかえって、この手の国際展が陥りやすい総花的な多様性とは一味異なる、地元密着型の血の通った熱い魅力をたたえている。前回の第 1 回目においても、サルキス、マイケル・リンなど世界的アーティストがこの土地に魅せられ、アートの力で、別府のポテンシャルを浮き彫りにした。

今回は、ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞のクリスチャン・マークレーをはじめアン・ヴェロニカ・ヤンセンズ、シルバ・グプタ、チウ・ジョーエ、廣瀬智央、小澤剛といった国際的なアーティストが参加し、市内各所で 8 つのプロジェクトが試みられたが、優れたアーティストの手にかかる、凡庸な素材や場所が全く異なった世界に変化することを証明した。

例えば餅ヶ浜埠頭に鈴を付した 100 本の幟を設置したマークレーの作品が、普段見慣れた場所を視覚と聴覚によって魅力ある風景に変え、さらに別府の闇の歴史ともいふべき旧地下街や遊郭跡にお

いて、都市の記憶や歴史を顕在化し、鋭く批評したグプタや廣瀬の作品などはその典型といえる。

これら一連のプロジェクトは、土地の魅力発見から、地域の歴史や文化の理解、さらにはコミュニティに根差した活動へと展開され、ネガティブと思われがちな場や施設にポジティブで積極的な意味を与えた。

国東半島では 11 月に「混浴温泉世界」と連動した「国東半島アートプロジェクト 2012」を開催した。アーティストが滞在して家をリノベーションし、空き家が異空間に変容する「いえをつくる」というプログラムと国東の自然や神仏習合の文化、暮らしや時間を感じながら巡る「アートツアー」というプログラムで構成された。六郷満山の独特なエリアである国東にアートが入ることによってミステリアスで新鮮な発見があった。主な作家はノマド村、千葉正也、飴屋法水、朝吹真理子など。

一方、大分市でも別府での動きと連携した形で、現代美術に傾斜した展覧会が開催され話題となった。大分市美術館で開催した「佐脇健一展」は、鉄やブロンズを自ら鋳造して風景彫刻に取り組んできた彫刻家による重厚長大な展示。「未来の記憶」と題されたその個展は、近代産業遺産の廃墟から現代の原発、ハイテク兵器まで、錆びて朽ちていく未来の時間軸をも垣間見せる。その完成度の高さや緊密な空間構成、テーマの普遍性に加え、別府にもサテライト会場を置くなどアウトリーチ活動も展開して多くの観覧者の感動を呼んだ。常設

展は、特集展示として「吉村益信展」、「風倉匠展」を開催。1960 年、ネオ・ダダで一世を風靡した我が国の現代美術のトップランナーたちの作品を写真、絵画、版画、彫刻、オブジェ、映像などで紹介し、そのアヴァンギャルドの精神を伝えた。

アートプラザでは、磯崎新の 60 年代から 2000 年初めまでの国内外の建築・プロジェクトを模型、デッサン、版画、ドローイングなどで紹介する「グローバル 海外・日本における展開」と海外でも評価の高いテキスタイル作家の新作を公開した「吉村正郎とその仲間達展」などが企画された。

また、県外では、熊本市現代美術館で国際的な現代美術展として、「生きる場所 ボードレスの空へ」展が開催され、栗林隆、塩田千春、マリーナ・アブラモヴィッチなど国や文化などの境界を越えたつながりや共感を生み出す表現の作家を紹介。そのほか、この時期の九州では、福岡、北九州、湯布院などで様々なイベントが行われたが、いずれも「混浴温泉世界」との連携が模索されていた。

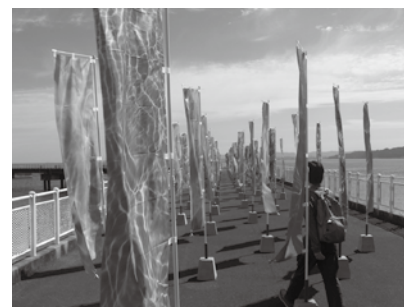
さて、この秋開催された、これら一連の現代美術のイベントや展覧会をどのようにとらえ、どう評

価すればいいのであろうか。

確かに、前回の「混浴温泉世界」が話題性や成果をあげたことに対して、周辺地域が相乗効果を期待したという見方はできるであろう。

しかし、それだけにとどまらず、別府の地元の人々がやや冷やかであったという 2009 年の反省から、2010 年以降 BEPPU PROJECT が取り組んだ「ベップ・アート・マンス」という小規模文化団体への育成・支援活動により市民自らが主体的に楽しみ盛り上げていくフェスタへと体質改善がなされた。それらアウトリーチや活性化が他の地域、自治体へと浸透し、近隣美術館の活動にも影響を与え、単なるエリアからコミュニティの醸成という意識改革につながったのではないだろうか。

2015 年春には、大分市の中心部に大分県立美術館（仮称）が開館する。今後、大分県、さらには九州ブロックの美術館が相互に連携を図りつつ、スタティックな施設としてだけでなく、日常と芸術をクロスさせる「場＝装置」として機能しうるダイナミックな活動を展開することがさらに求められるであろう。



「別府現代美術フェスティバル 2012 混浴温泉世界」
クリスチャン・マークレー会場風景



「佐脇健一展 未来への記憶」会場風景

保存研究部会

伊藤由美（神奈川県立近代美術館）

本年度は、2回の定例会合の開催を予定している。

第1回は7月12日、13日に実施した。初日は東京都写真美術館にて行い、保存科学専門員の山口孝子氏の案内により、資料の素材別に分かれた収蔵庫を見学、庫内で実際の収蔵品を前に写真資料の保存方法や保存資材についての説明を受けた。多くの美術館が写真関係の資料を所蔵する現在、非常にデリケートで特殊な素材でもある写真資料の保存についての説明や見学は、大変有意義であった。また、学芸員の三井圭司氏が参加している、「陸前高田被災写真デジタル化プロジェクトの概要」についてのレクチャーを受けた。震災後も長期に亘って続けられる被災作品の保存の問題を、写真という媒体について為されている方法やその活動維持のご苦労などが理解できた。さらに当日の議題として、昨年の震災前より改訂について検討していた「大災害時における対策等に関する要綱」について話し合われたが、東日本の被災館の被災状況調査が終わってから、改訂討議を進めてはどうかと言う意見があり、被災調査を先行させることにした。

2日目は神奈川県立近代美術館の葉山館の収蔵庫や空調機械室などバックヤードを見学しながら、収蔵の問題点などを話し合った。議題としては、現在、部会が継続テーマとしている作品貸借時に使用するコンディションチェックシートのフォーマットについて検討し

合った。ほぼ統一されたフォーマットで洋画（平面一般）、日本画、彫刻、工芸、映像などの種類別に担当者がたたき台を作り、それについて、皆で検討を重ねてゆくこととし、現在、準備を進めている。

第2回は2013年2月頃、岩手県立美術館にて開催予定である。同時期には常設第4期特集展示「救出された絵画たち—陸前高田市立博物館コレクションから—」の開催が予定されており、昨年、盛岡市内の作業場で応急処置が施され、本美術館に寄託収蔵されている作品の一部が展示される。その時期に本館で会合を開き、陸前高田市立博物館館長本田文人氏による「陸前高田市立博物館の概要と文化財レスキューについて」の講演を計画している。本部会合に於いても、コンディションチェックシートの内容について、検討を重ねる予定である。

部会合以外での活動としては、全美の復興対策委員会と共に進めている東日本大震災被災美術館、博物館総合調査の取りまとめである。阪神大震災の調査報告書作成を参考にまた、当時調査に参加した方々の体験を踏まえながら、保存研究部会が中心となり調査を行う予定である。既に、9月6日に分科会が開かれ、事前アンケート準備、調査マニュアルの検討、必要資材、調査対象館の選定などの準備を進めている。今回は10月23日に行われる予定である。



東京都写真美術館
資料保存方法の説明



神奈川県立近代美術館
葉山館
収蔵庫見学

教育普及 研究部会

前田淳子（山口県立美術館）

教育普及研究部会は通常年2回の会合を行っている。今年度最初の会合は11月22日から24日、東京都美術館を会場に実施した。11月22日は博物館における青少年教育をテーマに国内を視察中のドイツのミュージアムエデュケーターたちから、ドイツの博物館における青少年教育の状況について話を聞き、23日は東京都美術館主催の公開フォーラム「美術館コミュニケーションデザイン—『わたし』から始まる、物語の共有—」の運営に協力、参加した。今春リニューアルした東京都美術館が目指す「人と人、人と作品をつなぐ拠点」としての役割をテーマにした本フォーラムは、平田オリザ氏（劇作家）、大貫妙子氏（シンガー・ソングライター）による、人と作品、人と人を結ぶ場としての美術館についての話の後、メトロポリタン美術館における人々と作品を結ぶ事例、ウェブ上における美術館体験の事例を教育部パブリック・展覧会関連プログラム担当課長のジョセフ・ロー氏、メトロポリタン美術館デジタルメディア・オンライン出版マネージャーのテリサ・ライ氏から聞くものである。さらに、1970年代の都美術館で行われていた先進的な教育普及活動である「造形講座」と、リニューアル後の活動である「とびらプロジェクト」の事例を踏まえて、美術館と来館者とのこれからの繋がりについて考える場となった。24日は初日の議論をもとにし

て行われる美術館関係者を対象とした東京都美術館主催の研究会への参加である。美術館で来館者に（または来館しない人たちに）どのような美術体験を提供することができるのか。美術館の中でどのように具体的な取り組みを実践し実現していくのか。本フォーラムへの参加が美術館の教育普及活動の在り方を考える手がかりとなったことと思う。

2回目の会合は、2013年3月上旬に、長野県松本市の松本市美術館などの文化施設を見学し市民活動と文化施設の関わりについて話を聞く予定で調整中である。教育普及研究部会では2011年度の学芸員研修会を「社会教育と生涯学習の歴史と実践 ～美術館の教育普及活動を考えるために～」と題して企画した。これは美術館の教育普及活動の根幹となる社会教育について学ぶことで美術館の教育普及活動を見直そうという内容であった。研修会の実践報告をしていただいた手塚英男氏（松本市立あがたの森文化会館初代館長）の話を元に社会教育が盛んな長野県松本市で市民が美術館や博物館を利用している状況について見学する予定である。

このように、今年度の活動は、美術館と利用者との関係について考察する内容で準備を進めている。2回の会合を通して、教育普及の活動の在り方を各メンバーが考えていく機会にしたいと考えている。



ドイツのエデュケーター
による報告（11月22日）



美術館関係者による研修会
（11月24日）

情報・資料 研究部会

川口雅子 (国立西洋美術館)

情報・資料研究部会は2012年度、所蔵作品情報の整理・公開をめぐり二つの活動に取り組んだ。ひとつはワークショップ「所蔵作品情報の発信—『文化遺産オンライン』による実践」の開催、もうひとつは美術館の所蔵品目録を総覧できるようにする「所蔵目録の目録」化計画である。

前者のワークショップは、副題が示すとおり、文化庁が運営する文化遺産オンラインに焦点を当てたものである。周知のように文化庁は全国美術館に対し所蔵品データの提供・登録を求めており、それに応じて各館により登録されたデータが文化遺産オンラインに収録されている。しかし現状では十分なデータが整備されているとはいえず、信頼のおける検索手段となるにはいたっていない。そこで、美術館の参加を阻む要因のひとつとされる技術的課題（データ登録方法）を解決するため企画したのが本ワークショップである。

今回、当部会が文化遺産オンラインを取り上げることになった発端は、立ち上げから現在までその運用を支援してきた国立情報学研究所の高野明彦教授から連絡を受けたことであった。ちょうど部会で、昨年度まで開催してきたセミナーで「引き続き作品情報について学ぶ機会がほしい」という声を受け、これにどう応えるかを検討していた時期でもあった。こうして両者で協議・検討を重ねた結果、文化遺産オンラインをいわば作品情報公開の手段のひとつとしてとらえ、これを主題としたワークショップを実施する構想が具体化したのである。



ワークショップ講義風景
(国立新美術館講堂、2012年9月)

このような次第で2012年9月14日、国立情報学研究所、国立新美術館と共に国立新美術館にてワークショップを開催する運びとなった。当日は国立情報学研究所及び当部会からそれぞれ講師1名が立ち、最初に文化遺産オンラインの概要やデータ登録の方法が説明された。続いて参加者は予め用意されたユーザー名とパスワードを用いてデータ登録を体験した。各館が持ち寄ったデータと出力先（ここでは文化遺産オンライン）とで項目が異なる場合はどう対処するかなど、実践的な情報処理を学ぶよい機会となったと手応えを感じている。

しかし一方で、当初の予想より応募が少なかったこと、また会場からは文化遺産オンライン自体の考え方や今後の展望について知りたいという意見が出たことなどは反省材料となった。実習時間を確保するため今回はあえて文化遺産オンライン自体のありようについては触れなかったが、全美の一部会としては批判的精神を開示する工夫が必要だったかもしれない。

活動の第二は、文化遺産オンラインの現状が象徴しているように、美術品の検索手段としては今なお紙媒体の目録が有効であるという認識に基づくものである。本稿執筆時点では構想段階にすぎないが、会員館発行の所蔵品目録を集め、その書誌情報（収録作品データではなく、どのような所蔵目録があるか）を総覧できるようにする試みで、今年度後半から来年度にかけて実施の予定である。



ワークショップ実習風景
(国立新美術館講堂、2012年9月)

小規模館 研究部会

坪井則子 (公益財団法人佐野美術館)

小規模館研究部会は、建物の大きさ・予算規模・スタッフの数・収蔵品数など様々な点で比較規模の小さな美術館が集まり、小規模館ならではの様々な問題点を持ち寄って、その対処方法や新しい考えかたなどをお互いの活動の中から学び、実践していくための研究部会である。現在、北は北海道から南は鹿児島まで、独自色にあふれ、地域に根差し愛されて活動を続ける49館が加盟している。

2012年度の当部会は、まず5月29日、第61回全国美術館会議総会開催時に第35回会合を開いた。ここでは2011年度活動報告と決算、2012年度活動予定と予算が承認され、本年秋の第36回研修会の内容について討議をおこなった。

同研修会は11月20日(火)・21日(水)に佐野美術館を会場に開催された。11月末に新収蔵庫棟の竣工を控え、設計者である長谷川逸子氏(建築家)に「収蔵庫建設の最新事情」をテーマに講演をいただき、その後収蔵庫内を見学、質疑応答をおこなった。

また、前年度の研修会テーマであった「自然災害の認識と今後の取り組みについて」を引き継いで、防災マニュアルについての小規模館各館の認識を確認するテーマで討議をおこなった。事前に「防災マニュアルの実態と考え方」について、部会加盟館に一斉アンケートをお願いし半数強の回答を得たが、その結果をもとに意見交換をおこない、今回は一定の方向性や新たな問題点が出たところで次年度の研修会につなぐこととなった。いずれは小規模館の抱える諸事情を鑑みた防災マ

ニュアルの考え方を示していければと考えている。

研修会以外の活動として、前年度から共同企画展「マリー・ローランサンとその時代展—巴里に魅せられた画家たち」を加盟館5館に巡回していたが、2012年9月末で無事終了した。5会場で6万人以上の入館者を得、大変好評であった。小規模館は基本的に個性豊かなコレクションを所蔵しており、それをいかに多くの人々に見ていただくか、その方法を常に模索している。この企画は一定の評価を得た成功例となろう。各会場の入館者数は以下の通りである。

マリー・ローランサン美術館
2011年7月29日～9月30日
入館者数 9,950人
高梁市成羽美術館
2011年10月22日～12月25日
入館者数 5,341人
一宮市三岸節子記念美術館
2012年1月28日～3月11日
入館者数 11,235人
神戸市立小磯記念美術館
2012年4月14日～7月8日
入館者数 19,356人
ニューオータニ美術館
2012年7月14日～9月30日
入館者数 15,119人
※5会場合計入館者数 61,001人



第35回会合
(大塚国際美術館)



第36回研修会
収蔵庫棟見学
(佐野美術館)

ホームページ 部会

宮武 弘 (福島県立美術館)

ホームページ部会では、今年度も継続して全国美術館会議ホームページ (<http://www.zenbi.jp>) の運営に携わっている。2011 年から 2012 年にかけての活動はとりわけ、当部会にとって大きな意味をもつこととなったので、今回はその報告をしておきたい。

まず一つ目は、本誌創刊号でもお知らせした全美ホームページの全面リニューアルである。これは 2010 年度より準備を進めてきたもので、当初の計画どおり 2012 年 4 月 1 日より新装オープンを果たすことができた。

2006 年 4 月の開設以来、全美ホームページは小規模な変更を加えながらも、基本的な構造には大きく手を加えることなく維持してきた。しかし、サイトの情報蓄積が予想以上に進展し整理統合が必要となったこと、サイト内の導線はじめユーザビリティ上の難点、また大画面化に代表される近年の IT トレンドへの対応など、様々な課題が挙げられるようになった。さらに、ホームページへの掲載情報は日々増加していることから、更新作業にかかる労力も大きな負担となり始めていた。

そこで今回のリニューアルでは、CMS (コンテンツ・マネジメント・システム) を採用してホームページの土台ともいえるプログラムを刷新することとした。具体的には、画面の横幅を拡大することで全体の情報量を増やしつつ見やすいレイアウトとしたほか、メニュー項目の見直し、ログイン認証画面の変更 (認証前後で背景色が変わり現在の閲覧状

況を一目で把握できる) などの改善を行った。そして目に見えない部分ではあるが、運営面でも管理フォーマットを定型化することで、情報掲載、更新にかかる作業量を大幅に低減することが可能になった。今回のリニューアルによって全美ホームページは、利用者にとっても管理者にとってもさらに利用しやすいものになったといえる。

二つ目の変化として、部会の体制変更がある。部会設立から 7 年あまりが経過し、サイトのリニューアルを受けて全美ホームページも将来に向けて持続可能なモデルを構築できたことから、今年 2 月に開かれた全美理事会において当部会の体制および名称の変更を提案し、了承をいただいた。今後は、部会名を「ホームページ運営研究部会」から「ホームページ部会」へと改称するとともに、部会員も 3 名程度のコアメンバーを中心とするコンパクトな体制へと移行することとした。

このように、2012 年度から文字どおり再始動することとなった全美ホームページ、そしてホームページ部会であるが、これからも引き続き、有益なコンテンツの提供に向けて取り組んでいきたいと考えている。なお、当部会では部会員という形式にこだわらず、アドバイザーというかたちでご協力いただけるメンバーを随時募集している。メールでの連絡や意見交換を中心とした負担の少ない活動が中心となるので、興味のある方はぜひご連絡をいただければ幸いである。

全国美術館会議ホームページ
<http://www.zenbi.jp/>

機関誌部会

尾崎信一郎 (鳥取県立博物館)

機関誌部会は 2008 年より活動を再開し、全国美術館会議独自のニュース誌の発行をめざして準備を進めてきた。2011 年の理事会で機関誌を発行することが承認されたことを受け、昨年度より『ZENBI 全国美術館会議機関誌』の発行に向けて編集作業を始めた。多くの執筆者の協力を得て作業は順調に進み、本年 1 月 1 日付で創刊号を発行することができた。創刊号は A5 版、全 64 頁。主たる内容としては、報告記事として東日本大震災のレスキュー事業に関する三本の記事、各部会の報告、新規会員館の紹介、「ZENBI フォーラム」と題した投稿欄には加盟館職員より寄せられた 5 本の記事を掲載した。創刊号は 2,000 部を発行し、加盟館に各 4 部を配布した。一般への頒布、販売は行っていない。

その後、本年 2 月に開かれた第 1 回企画委員会、第 2 回理事会の席で、活動の実態に即して部会名を「全国美術館会議ニュース研究部会」から「機関誌部会」へと改称すること、原田平作理事の退任に伴いしばらく空席であった部会長として、長谷川三郎鳥根県立美術館館長を選任することが決定された。

本年度の活動としては 4 月 28 日に最初の部会を開催し、第 2 号のブロック報告の執筆者について協議した。創刊号の場合と同様に理事からの推薦依頼に基づいて執筆者を選定して執筆を依頼した。さらに突然に依頼しても準備が困難であろうという反省より、この時点で第 3 号の報告者についても選定して執筆を依頼することとした。このほか 5 月の総会で承認される

予定の新規会員館 3 館について加盟館紹介の原稿を依頼し、「ZENBI フォーラム」に関しても既に寄せられていた原稿に関連する記事や注目すべきいくつかの展覧会について関係者に追加的に原稿を依頼することとした。「ZENBI フォーラム」は特集主義をとらないが、創刊号の震災関係の記事に続き、第 2 号では美術館倫理規程に関連した記事が集まり、はしなくも今日の美術館をめぐる問題の所在を明らかにしたように感じる。寄せられた原稿をもとに、7 月 14 日に表記や内容の統一をはかる部会を開き、再校を経て 8 月 1 日に『ZENBI』第 2 号を発行した。報告記事としてはブロック報告と新規加盟館紹介、投稿記事としては「ZENBI フォーラム」へ 8 編の文章を収録した。記事の全体量が減ったため、創刊号に比べてやや余裕のあるレイアウト、全 52 頁の構成となった。発行部数と配布方法は創刊号と同様である。

第 3 号はあらかじめ依頼した執筆者によるブロック報告と各研究部会の報告、「ZENBI フォーラム」への投稿記事によって構成し、2013 年初頭の発行をめざして準備を進めている。発行を重ねる中で部会の編集態勢も整ってきた印象があり、今後もこのペースで発行を続けたい。

なお、『ZENBI 全国美術館会議機関誌』の内容は順次、ホームページ上でも公開する予定である。創刊号については全ての執筆者から著作権の許諾を得て、現在、公開の準備にとりかかっている。



『ZENBI』1号と2号

美術館運営制度 研究部会

山梨俊夫 (国立国際美術館)

当部会は今年の検討テーマとして「美術館倫理規定」を掲げている。ICOM が示した倫理規定(2004 年)、日博協が作成した博物館倫理規定の報告書(2011 年)がすでに存在しているので、それを精査して全国美術館会議独自のものが改めて必要であるかどうかを考えることからこの作業を始めることにした。

2 月 7 日に行なった第 15 回部会(国立西洋美術館)では、過去に全美でこの問題が検討され結果として途中で頓挫した経緯が確認され、倫理規定が美術館の現場でどういう意味をもつのか、全美独自につくる意味はどうか、などの点が議論の対象になった。この日は他にも、施行された国家補償制度の問題点や指定管理者制度の現状、非常勤職員の給与問題などに関しても議論が交わされたが、それらについては必要に応じて取り上げ、部会として今年は倫理規定を中心に検討することで合意された。

3 月 6 日に、2 月の部会を受けて大阪の国立国際美術館で開かれた第 16 回部会では、主な点として次のことが話された。先に挙げた「日博協倫理規定報告書」「ICOM 倫理規定」が存在するので、全美独自のものをゼロから作り上げる必要はないだろう。それをつくらなくても、その具体的な理由付けが必要である。既存のものを下敷きにして全美に則した規定を作成する場合にも、部会だけではなく、社会状況との関連を考えるために、研究会やシンポジウムを開くのが望ましい。小冊子状のものを作成するのなら、美術館職員以外にもボランティア、友の会などと広く共有できる内容が必要。それらについて意見交換しながら、今後の方向を話合った。日博協の報告書作成に美術館側から加わった佐野美術館の渡辺妙子館長、原美術館の安田篤生氏、ブ

リヂストン美術館の貝塚健氏らの聞き取り調査をすることを目指し、部会員自身、さらに既存の資料を読みこむことを約し、次回は 5 月の総会後に部会をもつこととした。

5 月 29 日の大塚国際美術館での総会終了後、同所で第 17 回の部会。3 月の時点から 5 月までの間、部会のメンバーのうち、河崎晃一氏、浜田拓志氏、筆者など数名は、昨年から活動をしている東日本大震災復興対策委員会にも加わって、そちらの活動に時間を取られることが多かったため、部会自身の課題に取り組む時間が確保できなかった。それゆえに第 17 回部会では、これまでの議論の整理、今後の方向を確認するにとどまった。秋に次の部会を設け、部会の課題を進展させることを約して散会した。

なお、当部会が直接専念すべき課題ではないが、この「ZENBI」で報告する場がないようなので、今年の復興対策委員会の活動にもここで簡単に触れておきたい。

今年は 2 月 8 日に第 2 回東日本大震災復興対策委員会、4 月 26 日に第 3 回、5 月 18 日、7 月 25 日に臨時委員会、9 月 25 日に第 4 回、12 月 21 日に第 5 回が開かれ、現在までに 22 件の事業について復興対策委員会で採択され、理事会で承認が得られている。うち 7 件はすでに事業も終了しているが、この委員会を中心にした復興対策事業は、今後とも継続されていく。このことについて採択された事案の内容など、全美のホームページに詳しいのでそちらを参照していただきたい。

また、末尾ながら長年部会の幹事を務められた兵庫県立美術館企画・学芸部門マネージャー河崎晃一氏が今春定年を迎えられた。その労を多し感謝申し上げたい。また、美術館を退かれたのちも部会に参加していただいている。重ねてお礼申し上げる。

文化財レスキューの成果と課題を考える

東日本大震災の被災地で行われている文化財レスキュー事業には、2011年4月以来、非常に多くの全美会員館の方々にご協力いただきました。この事業は、文化財・美術関係の諸団体と被災各県の教育委員会が共同で組織した「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」を主体とするもので、全美も参加団体のひとつとして救援委員会の活動の一端を担っています。救援委員会による救出・保全活動は、全美の会員館でもある宮城県の石巻文化センターに始まり、次いで宮城県内の諸施設、さらに岩手県、福島県、茨城県において順次実施されました。2011年度の活動の概要は、2012年10月に発行された300頁におよぶ救援委員会報告書にまとめられています。

被災地では現在もなお文化財の救出と応急処置活動が続いており、レスキュー事業の対象となった大量の文化財のすべてが所有者のもとへ戻るには、まだ何年もの時間を要します。また、文化施設の作品・資料救出はほぼ目途がついたものの、民家の解体などにより個人所蔵の資料が散逸の危機にさらされるのはこれからだ、という指摘もあります。しかし、救援委員会は緊急時の対応を任務として設置されたことから、平成24年度末（2013年3月）をもってひとまず役目を終えることが、去る11月13日の第6回全体会議で了承されました。

2年間にわたる救援委員会の活動は、1995年の

阪神・淡路大震災の際の救援活動をはるかに超える規模であつたうえに、津波による被害や原発事故の影響など、前例のない問題によっていっそう困難なものとなりました。そのような状況に直面しながら、さまざまな分野の文化財関係者の連携協力のもとで行われた今回の救援活動は、将来に活かすべき多くの貴重な経験を含んでいます。そのため、救援委員会が任務を終えるにあたり、連続公開討論会を開いて今回の救援活動の成果と課題を検証し、多くの人々の意見を集めたうえで救援委員会としての提言を作成することが計画されています。

救援委員会の主催による公開討論会は、「被災文化財救援活動について考える会 語ろう！文化財レスキュー—被災文化財等救援委員会公開討論会—」と題して、東京国立博物館を会場に、2013年1月23日（水）、2月4日（月）、2月22日（金）の3回にわたり開催されます。さまざまな立場から救援活動に携わった人々が討論に参加し、文化財の概念、救出活動の技術と人材、マネジメント、連携体制などのテーマについて公開の場で議論を行い、最後に提言の作成に向けた意見の集約を行う計画です。詳細については全美ホームページに掲載した開催要項をご覧ください。多くの方の参加をしたいと思います。

企画担当幹事 村上博哉（国立西洋美術館）

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。

- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

編集後記

『ZENBI』の第 3 号をお届けする。今号は定例の記事としてはブロック報告と部会報告を掲載した。全国美術館会議には 7 つの研究部会があり、美術館活動と深く関わる問題について研究し、あるいは全国美術館会議の活動を広報している。総会の際の短い発表だけでは活動の内容を理解することは困難であろうし、そもそも総会に参加する美術館職員は限られている。今後、『ZENBI』では奇数号において各研究部会の一年間の活動を報告していく予定であるから、お読みになって関心を抱かれた美術館職員は是非各部会への参加をお考えいただきたい。現在、美術館をめぐる状況がかつてなく厳しいという認識は多くの関係者に共有されているだろう。このような時代であるからこそ地道な研究活動を続け、いわば美術

館の足腰を強化する取り組みが必要であろう。

本誌は加盟館に 4 部ずつ配布されているが、回覧された後、多くの場合、資料として書庫に死蔵されてしまっているのではないかな。これまでとはひとまず発行することを目的としてきたが、これからはさらに多くの人の目に触れ、全国美術館会議の活動と現在の美術館が抱える問題を広く広報、周知していくことをめざしたいと考えている。このために来年度以降は一部のミュージアム・ショップで販売することを検討している。また創刊号については全国美術館会議のホームページで閲覧できるようになった。今後も本誌の内容については順次ホームページで公開して行く予定である。読者拡大に向けて、本誌をお読みになった方々の御協力をお願いしたい。 (O)

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕

- ・ 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・ 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・ 原稿には表題を付けてください。

〔投稿の資格〕

- ・ 全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・ 匿名の投稿は受けつけません。

〔投稿に係る詳細〕

- ・ 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

〔締切〕

- ・ 第 4 号 (2013 年 7 月発行予定) に関しては 4 月 30 日、
第 5 号 (2014 年 1 月発行予定) については 10 月 31 日を締切とします。(当日必着)

〔提出先〕

メールの場合

matuyama@ma7.momak.go.jp

郵送の場合

606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事 松山利光

〔問い合わせ先〕

内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください
680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事 尾崎信一郎
E mail: s-osaki@pref.tottori.jp